

心に残る園長の思い出

川口幸男*

動物園の歴史に関しては、諸先輩の著した論文や著作が数多くあるが、理解しやすいように礎を築いた園長を幾人か取り上げ、彼らがどのような功績を残してきたか紹介しよう。

I H・ヘディガー博士

何時の時代にも優れた人はいるもので、私が初めに紹介したいのは、H・ヘディガー博士（教授）である。かれは1930～1940年代、ドイツのパーゼル動物園園長やチューリッヒ動物園長として勤めた時代に培った動物の科学的な観察と、中央アジアやオーストラリア、太平洋の島々を広く探検して野生動物の生態研究も合わせて行った。優秀な知識と豊富な体験を基に名著と誉れの高い、

WILD ANIMALS IN CAPTIVITY,

An Outline of the Biology of Zoological Gardens by H.HEDIGER

を著作した。原本は1942年ドイツ語で書かれたが、その後1950年英語版が出版され、世界中の動物園関係者に深い感銘を与えた。日本国内では、今泉吉晴博士と今泉みね子氏の名訳によって、『文明に囚われた動物たち』と言う表題で1983年思索社から出版された。原本の初版から40数年後であるにもかかわらず、動物園関係者に大きな影響を与えた。

本書では、動物園が直面している生物学上の問題を次の3点にまとめて、さまざまな動物の研究例を提示しながら、12章に分類した。

- | | |
|-------------|-----|
| 1 空間の問題 | 10章 |
| 2 食物の問題 | 1章 |
| 3 動物と人間との問題 | 1章 |

1 空間の問題

大きなスペースを割いているが、そのさわりを紹介する。それまで鳥類において認められていた“なわばり”が哺乳類や他の動物にもあり、それは同じ生息域にすむ他種間の動物や同じ群れの中にもある。そして、繁殖期と非繁殖期の行動が著しく違うことに触れている。動物園の園長として長年動物を飼育した経験を踏まえて、動物が文明に囚われたとき、どのような心理的、生物学的な変化をみせるか、動物園の人々が注意すべき留意点について述べている。

たとえば、人間が野生動物に近づける距離は、キリンでは約150m、アメリカバイソンならば250～350mで、それ以上近づけば彼らは逃げ始める。しかし、動物園で飼育するときは、そのような遠くから見ることはなく、間近で見ため、逃走を始める距離がゼロになるように動物を馴化させる。馴化は捕獲のときの状況や、種、個体差などで違い一様ではない。その他にも、気候や太陽の効果、植物と動物の関係など、実に多岐にわたっている。

2 食物の問題

動物の食事を質と量で考えると、アリクイやコアラのように単一の食性動物と偶蹄目や奇蹄目のように多種類の草を食べる動物では、給与する種類数と回数を充分考慮して変える。そして、繁殖期と非繁殖期による餌の関係、排泄から得る健康に関する情報収集や排泄物の動物園での処理法にも触れている。

3 動物と人間との関係

動物園の責務として、動物園がレクリエーションの場としてのみ存在するのでは、野生動物を捕らえて飼育する理由にはならず、できうる限りその動物の生息環境を整えて飼育するべきである。また、種

*元上野動物園

が絶滅していく中で動物園が飼育していれば、保護に繋がるが、それは動物園で繁殖を成功させることが前提となる。従って単独で飼育することは容認されないが、繁殖可能な条件を見出すことができれば、野生動物を捕獲し、飼育下におくことが許されるだろう。そして、人間が自然を理解するために、弁解の余地があるだろう。

個体数の少ない種については、国際間で協力して繁殖計画を実行することが望ましい。動物園で飼育し、得た知識を活用してアメリカバイソンやコアラ、パンダ、シフゾウなどは絶滅を免れた代表例である。いずれにせよ、野生動物の捕獲によって種を絶滅させることは防がねばならない。

1942年に執筆されたこの理論は、現代でも通用し、バイブルのように世界の動物園でその精神が脈々と受け継がれていると言えよう。

Ⅱ 古賀忠道園長

上野動物園は明治15年(1882)3月20日、農商務省管轄の動物園として開園した。その後、大正12年(1923)皇太子殿下御成婚記念として、上野公園と動物園は東京市に下賜され、これより上野恩賜公園動物園となった。そして現在の恩賜上野動物園に改名されたのは、昭和22年(1947)のことである。初代園長を誰にするか諸説あるが、はじめに責任者となったのは、石川千代松動物園監督、2代目が黒川義太郎園長そして古賀園長へとバトンタッチされ、2010年現在の園長は15代目小宮輝之園長である。

さて、古賀忠道氏は東京帝国大学農学部獣医学科を昭和3年(1928)に卒業すると、昭和7年(1932)主任として上野動物園に採用され、正式に園長となったのは昭和12年(1937)で、以来昭和37年(1962)まで、実に25年間園長を務めた。動物園はその性格上、世界の国々から動物の輸出入を行わねばならず、諸外国との交流が多く、古賀園長は世界園長会議や視察で世界各国を歴訪した。一方、一般の人々は、まだ動物園は見世物小屋に毛の生えた程度としか思わなかった時代、世界を巡り、欧米諸国の先進的な動物園を視察した園長の知見は園内のみならず、国内に雨後の竹の子のごとく次々と開園する動物園に大きな影響を与えた。また、世界的な視野から日本の名園長として世界の動物園長と対等

に渡り合う知識があり、それは予算獲得の際、本庁にあたる東京都の幹部を説得するとき優位であった。本庁の問題は動物園の運営や方向性と関係ないと考える人もいようが、本庁の承認は容易にできないのが常だが、古賀さんが言うならば、と認めてくれたことも度々あった、と聞いている。

本誌では、その業績のうち数点を紹介しよう。

一つは多摩動物公園の開園である。昭和31年(1956)に建設が始まり、昭和33年開園した。上野動物園の広さは約14ヘクタール(約16万坪)であるが、多摩動物公園は約60ヘクタールに及び、いかに壮大な計画だったか理解できよう。ここまで大きな動物園を計画したのは、世界各国の動物園が広い敷地にゆったりと動物を飼育している光景を視察してきた結果であろう。

次に、昭和25年(1950)不忍池周辺に動物園の敷地が拡張されると、70周年記念事業として、アフリカ生態園が建設された。これはパノラマ方式と呼ばれ、アフリカのケニアを想定して作られた。一番低いところにフラミンゴやカバ、中段にキリンやヌー、シマウマ、そして上段にライオンとバーバリージープの山を作り、各段の間を空堀で仕切り、動物の通路として使った画期的なものであった。

さらに、昭和43年(1968)には世界野生生物基金WWF(World Wildlife Fund)の日本委員会を設立し、事務所を動物園協会内において理事長に就任した。なおWWFの名称は昭和63年(1988)から(財)世界自然保護基金に変更している。このほか取り上げれば枚挙にいとまがなく、動物に関する組織や団体は東京都のみならず国の関係省についても歴任し、これらの業績から正四位勲二等旭日重光章に叙せられ、昭和62年(1987)、82歳で永眠した。

Ⅲ 林 壽郎園長

古賀忠道園長の後を引き継いだには林壽郎氏で、彼は東京大学理学部動物学科を卒業し、昭和33年(1968)多摩動物公園園長、その後古賀忠道園長の退職に伴い昭和37年(1972)上野動物園園長となった。豪放磊落なスケールの大きな園長で職員の中でも人気の高かった園長であった。

彼を一躍有名にしたのは、70周年記念事業として、アフリカに出張してカバなど大型動物を収集したことであった。昭和26年(1951年)10月に出

発したが、不運にもアフリカに到着すると朝鮮戦争が激化してきた。当時のケニアはイギリスの植民地であり、船舶はイギリス軍の兵員輸送に船を使うため、日本に動物を送る船の都合ができなくなった。そうこうしている内に、ビザの期限切れ、収集した動物たちの口蹄疫の発症、輸入業者とのトラブルなど難題が続き、ようやく翌年6月に出航にこぎつけた。延期した結果、カバ、サイ、キリン、ブチハイエナ、チーター、ツチブタほか48点に及ぶ多くの動物を積んで帰国できた。

彼の考える世界は雄大で、多摩動物公園にライオンバスを世界に先駆けて導入した園長としても有名である。ライオンバスというのは、ライオンを放し飼いにしている中に、観客を乗せたバスを走行させて間近で見せるもので、サファリ形式の先駆者でもあった。かれは、このアイデアをアフリカで動物を収集したときにひらめき、その構想が多摩動物公園に生かされたのだろう。

このほかに、昆虫にも造詣の深い彼は、東洋一と謳われる昆虫園を作るため、昆虫の専門家で、豊島園の昆虫園に勤務していた矢島稔氏（現在、群馬昆虫の森園長）を多摩動物公園に招聘し、現在の素晴らしい昆虫園に至っている。

IV 中川志郎園長

現在までに、15人の園長を輩出し、それぞれすばらしい業績を残しているが、昭和62年（1987）～平成2年、第9代園長として活躍した中川志郎園長を紹介する。

彼は昭和44年（1969）～45年にかけて、おもにイギリス、スイスの動物園に留学し、その他ヨーロッパ及び北米の主要な動物園を歴訪し、当時の最先端の動物園学を学んだ。そこで、留学当時の様子を、東京動物園協会発行の雑誌「どうぶつと動物園」に送って近状を報告しているので、いくつか抜粋してみた。

1 イギリスとヨーロッパ

当時の日本にはまだ動物保護法がなかったが、イギリスではすでに制度化され、動物の福祉 The welfare of animal が重要視されていた。主なものとして以下がある。

- 1) The protection of Animal act 1911（動物保護

法)

- 2) Wild birds protection law 1880-1921（鳥類保護法)

- 3) Pet animal act（愛玩動物法)

これらの法律を具体的に実行運営しているのが、R.S.P.C.A（王立動物虐待防止協会）で、動物園の動物も適用をうけている。このほかに、イギリスの動物園協会（The federation's British Zoo）により、動物が保護されている。

さらに、ヨーロッパの動物園は教育活動と自然保護活動の強化を目指し、次の事業も行っている。

- ①学校団体入場時のパンフレット配布、学生と成人用のガイドレクチャーを作成。
- ②希少動物のための特別な研究活動を行う。
- ③繁殖のために、観客に見せないブリーディングファームをもつ。

また、植物について、チェスター動物園では、単に動物舎の背景や庭園の美観だけでなく次の6つの意味がある。

- ①安全策としての効果
- ②観客の導線を形成
- ③消臭効果
- ④日陰効果
- ⑤鎮静効果
- ⑥美的効果である。

2 スイス

バーゼル動物園は、ヘディガー博士が理想的な動物園のあり方を構築したことはすでに紹介したが、そこで最先端に行く動物園のあり方を学んだ。

たとえば、動物園で最も重要な仕事の一つである繁殖の秘訣を次の5点にまとめている。

- ①よい個体を選ぶこと
- ②動物が安心できる動物舎構造であること
- ③栄養的にバランスのとれた飼料の給与
- ④飼育動物の性比が考慮されること
- ⑤キーパーが動物と親密であること

飼育係が担当動物と仲が良い結果、動物に信頼され、精神的に落ち着いていることが繁殖の成功につながっている。また、ゾウの曲芸が盛んだが、アトラクションというより、運動を促進することに意味がある。

このほかにも有形無形のことを学び帰国すると、次々と新しい試みを始めた。マスコミへの対応も巧

みで連日テレビ、ラジオ、週刊誌で取り上げられると、パンダの初来日では入園者数がそれまでの300万人台から倍増し700万人を超えた。

彼の行った成果を次に列挙してみた。

(1) 人材の育成

一番の長所は人材の育成に優れていたことであろう。職場において各人の長所を見出し、活用するのが巧みであった。動物園のみならず国や大学、その他招かれたそれぞれの職場で様々な仕事を成就していくのだが、行く先々で手助けする人材を指導し育成し、その輪を広げていった。

(2) 目的の明確化

欧米留学で学んだもので、日本でまだ実現していない事業について、目的と実現に向けての方法を示し、次々と実現していった。たとえば、動物園を単なる見世物ではなく科学的な教育施設として動物を見せるために解説する人々として、動物園ボランティア（昭和49年：1974）、シルバーガイドの募集、及び動物解説員（昭和62年：1989）制度を導入し、大きな組織として環境教育の強化に努めた。

平成2年（1990）には、東京都第三次計画を策定し、ズー2001構想を組み入れ、長期的な展望の元に今後動物園の進むべき道を示した。この構想は、都立の上野、多摩、葛西、井の頭、伊豆大島の各動物園について総合的な構想で、統一理念と各園の役割分担を決めた。上野動物園は都市の総合動物園として、「高度の情報提供企画」が課せられ、情報センターとしての役割も与えられた。このように巧みにソフトとハードを連携して動物園を機能するようにしていった。

(3) 動物に関する法律化の実現

動物の保護に関する法律も日本ではまだ制定していなかったが、動物の愛護及び管理に関する法律の制定など、欧米並みに法制化の必要性を訴え実現に貢献していった。退職後は（財）日本動物愛護協会の理事長になり、動物愛護に関連する法律の実現に貢献を続けている。

(4) 葛西臨海水族園の開園

平成元年（1989）には、後に園長となった水産科出身の安部義孝氏の協力で、マグロなどの大型海

水魚と生態展示、造波、実験展示、深海性魚類、潜水鳥類、などこれまで飼育が困難とされていた種の飼育、さらに映像を駆使した手法で生命の神秘を表現する計画を進めたが、いずれも過去に実績のない仕事のため困難な事業であった。

(5) 国際化への対応

急速に広まる世界の動物園との交流に留学経験と海外の多くの友人は国際交流のときに大きな力になった。世界各地の動物園や水族館と友好提携を進め、ますます国際的な動物園へと飛躍した。

動物園を退職すると、茨城ミュージアムパーク園長、日本博物館協会会長を歴任し、現在、日本動物愛護協会理事長ほか多くの機関で活躍している。

私は昭和34年（1969）上野動物園に採用になり、園内の独身寮に入ったが、そこに先輩が一人すんでおり、それが中川志郎先生であった。独身寮の上には園長公舎があり、古賀園長のご一家が住んでいた。私が朝7時ころ事務所向かうころ、古賀園長は双眼鏡とカメラをぶら下げて園内の巡回を終えて帰る頃だった。毎朝、飼育係員より早く動物を見ているのだ。動物園の園長は、一番動物のことを知らねばならないというのが、欧米各国から学んだことの一つであろう。

中川先生は、臨時職員として5年間上野動物園に勤務したが、昭和25年（1950）～昭和26年にかけて、上野動物園は移動動物園を作り、関東から東北にかけてゾウのインディラをはじめ多くの動物たちを、特別仕立ての貨車にのせて動物園がない地方に巡業した。このとき獣医師として同行し、飼育員や動物と一緒にまさに寝食を共にした経験が、その後の人材育成に大いに役立った、と述べている。一番底辺で働く飼育員の気持ちもよく理解し、かれらと心が通わなければ動物園の仕事はうまくいかないことをよく理解されていた。さらに、古賀園長や林園長から絶大な信頼を得て、欧米に留学し海外にも多くの友人を得た彼は、国際化の進む動物園の流れの中で理想的な動物園界の指導者となった。

参考文献

文明に囚われた動物たち H・ヘディガー著 今泉吉晴・今泉みね子訳 思索社 1983
上野動物園百年史 東京都恩賜上野動物園 東京都

- 1982
- 上野動物園 小森 厚 郷学社 1981
- もう一つの上野動物園史 小森 厚 丸善ライブラリー 1997
- 上野動物園 石田 戢 東京都公園文庫 16 (財)東京都動物園協会 1998
- 多摩動物公園 中川志郎 東京都公園協会監修・東京公園文庫 6 郷学社 1981
- どうぶつと動物園 中川志郎 (財)東京都動物園協会 1969, 4～11
- 古賀忠道 その人と文 古賀忠道先生記念事業実行委員会編集 第一法規 1988
- 謝意の葉ーひと・動物・自然ー 中川志郎 印象社 2005